

## 国内放送の現状

日本放送協会技術部 村瀬一雄

### 終戦と放送

8月15日、終戦を宣し給へる玉音が放送会館スタジオ内の録音再生機から流れ出て、全国津々浦々へ放送せられると、我々放送に携はる技術者は初めて拝聴する陛下の御声に事の重大さを感じ、我々技術の優劣が国民に如何許り大きな影響を齎すものであるかを痛切に感じたのであつた。

戦争中には放送の最大の使命は防空警報・情報の伝達であるかの感があり、国民亦此のメガホンの放送を渴仰して徒らに受信機の市値を高騰せしめてゐたのであるが、終戦の玉音放送を契期として放送が戦争の利器から平和の利器文明の利器へ還り、更に放送の民主化を図るべき時に当り、放送技術に於ては、少くとも速かに戦前の状態に復帰せしめねばならぬ。職前と雖も決して先進国とはいへなかつたラジオ技術が更に戦争中大きな遅れを取つたであらう事に思ひを致し、米国などの最新技術に教を乞ひ、速かに放送技術の水準を挙げ、真実に国民が音質の良い放送を楽に聴取できる様に、技術の民主化に邁進せねばならない。

### 中波放送の現状

戦争中は電波管制が行はれて、大電力の放送はその電力を制限せられ、聴取状態は一部劣化したにも拘らず専ら同一周波数放送に依つてゐたのであるが、戦争が済んでしまへばその必要もなく、早速大多数の局を戦前の周波数に復帰させた。たゞ放送電力の方は東京の大電力放送も真空管の製造能力が仲々復旧しないために目下の処戦前の150KW放送には恢復してゐないが50kW迄は増力したので関東地方の聴取者には余程便利になつた。戦争中に新設せられた幾多の小電力の中継放送所は戦後何れもその存続を地方より要望せられるので、現在これらの小局を合せると全国局所の数は84ヶ所の多数を数へてゐる。従つて割当らるべき周波数も非常に窮屈になつたので若干の同一周波数放送は止むを得ず実施せられてゐるが、遠隔の小局相互間に行つてゐるので、電波干渉の弊害も殆んどない様である。

さて戦災による放送局の損害は、幸な事に各放送所は空中線敷地の関係で大抵都市の郊外にあつたので、焼失したものは僅かに数ヶ所に過ぎなかつたが、各放送局を結ぶ中継線の方が大抵都市を通過してゐたので損傷甚大と云ふ可く、これがため未だに不通で無線中継によつてゐる局も多数あり、かつ差当り代用線により恢復せるものもその特性不良のもの多く、戦後の放送は特に地方に行くに従つて戦前に比して音質が相当悪化してゐる状況である。資材関係などのため早急の改善も困難であるので、現在短波中継或は他局の中波無線中継を行つてゐる局が相当ある。

### 短波放送の現状

戦争終結前 Radio Tokyo として諸外国で注目してゐた日本の海外放送は、その人気物となつた「東京の薔薇」と呼ばれた一女性の名調子も、本家本元の日本人は短波聴取厳禁の重い耳枷に縛られて、本職の放送局員ですら、その電波を聞いた者は稀であつた。この海外放送は終戦後の9月10日から全部停止せられたので、今日短波聴取の自由を得た時には既に Radio Tokyo は消滅してゐたのは皮肉といふべきである。一方国内放送のプログラ

短波放送表 20.12.1 現在				
放送種別	送信所	電力	呼出符号	周波数
国内第一	河内	10kw	JVW	7157.5kc
国内第二	足柄	20	JLG	7285
"	多摩	"	JLG5	7552.5
在外部隊向	名崎	10	JLG3	11705(昼)
			JLT	6190(夜)

ムを伝送する中継線は、戦災等の為に全国的に甚しく劣化したのと、戦前東東・大阪・名古屋に限られていた国内第二放送を更に他の主要都市に実施する為にも、現在の中継線では不足、不十分であるので、東京発の番組を地方の各局に送る為に、9月11日より国内放送の短波送信が急速に拡充せられた。この送信は送信機の都合や、季節による周波数の変更等の為に、時に送信電力、使用送信機、周波数等が変更せられる事があるが、現在は別表の如く運行せられてゐる。

## アマチュアと放送技術

戦争がすんで、放送の各面において抑圧と制限が撤廃せられたが、その中でも短波聴取の禁止を解放せられたことは最も大きな事の一であらう。戦争中全く型に嵌められて逼塞してゐた放送技術も最早自由なる発展を許される時代となつた。換言すれば今まで上から押し付けられた放送技術であつたが、これからは下から盛り上げる技術によつて急速な発展を期すべきである。これを具体的にいふならば、現場の技術者やアマチュアの新鮮、活発なる着想と実験と経験などが土台となつて技術体形を創造せねばならないと考へる。短波聴取解禁となつても当分資材不足の関係で実際聴取する人は極く稀といつて良い。恐らくその稀な人々の中には本誌の愛読者たるアマチュア技術者が相当数占めてゐるのではないかと考へる。これらの人々こそ短波再出発に当つての有力なる開拓者であらねばならない。真摯なる研究と実験に邁進せられんことを望む次第である。

(『無線と実験』1946年2月号。旧漢字は新漢字に変更した。仮名遣いは原文のまま。)